



序 文

阿波学会会長 小林 勝 美

徳島県を代表する高峰剣山とその周辺の総合学術調査を4回にわたって実施してきた。剣山は学術的にも重要で、徳島の気候や地質の生成や動植物の生息にも大きな影響を与え、各地域に特色ある文化を育んできた。阿波学会総合学術調査は平成16年に旧木沢村（現那賀町）を手はじめに、平成18年には旧東祖谷山村（現三好市）、平成20年には旧木屋平村（現美馬市）、本年の旧一字村（現つるぎ町）の調査で終了することが出来ました。このように短期間に集中、継続した調査研究は、現状を把握する上にも大変有意義なことで、その成果は随時研究紀要に報告してきました。また、各地域の住民の方々も自然環境や文化景観に関心が高く、結団式、発表会には多数の住民が参加して、私達や行政側に対して、今まで築いてきた生活文化や地理的景観の保存保護、さらには、高齢化や過疎化が進む中で、いかに現状を打開し、将来に引き継いで行くべきかに熱い質疑応答が行われました。

平成22年度阿波学会総合学術調査は平成22年7月30日の結団式から8月8日までの10日間を中心に、16班（学会）100名前後の会員が参加して実施されました。旧一字村は急峻な山地が多く、その上、今年の夏は特に猛暑で、苦勞の連続での現地調査となりました。つるぎ町は現在、巨樹巨木の注目度が高く、巨木フォーラムを開催し、全国へ発信し、観光資源としても売り出している。地域の人々も意識が高く、私達も勇気づけられた調査となりました。つるぎ町の兼西茂町長様はじめ、町会議員、教育委員の方々の厚い御支援をいただき、特に生涯教育課の課員の全面的な協力により充実した実り多い学術調査となりました。また、結団式当日は地元の廣澤政文氏より「つるぎ町の巨樹、巨木」の講演をいただき、会員一同、調査に入る前に、地域の現状を十分把握しての現地調査となりました。

私もつるぎ町の板碑調査で参加いたしましたが、高齢化とともに現地調査に備えて体力増強を図らねばならなくなってきましたので、今年も5月連休頃より毎日の散歩道を延ばし、川の土手を上へ下へとアップダウンを繰り返し足腰の鍛錬に努めました。現地では板碑を捜すのにも、急傾斜で一苦勞するし、拓本採りにも両足を大地に踏ん張っての体勢には力が入ります。その上、数をこなさなければならないし、拓本そのものも石の表面の乾きの微妙なタイミングが必要で、手抜きはできません。最後は気力と体力の勝負となります。つるぎ町の板碑も山奥で捜す苦勞に悩まされながらも、天正13年（1585）の紀年銘の拓本を採った時は、最高にうれしく、疲れも忘れさせてくれました。それは徳島県でも最終期の板碑であり、文化財指定に匹敵する大変貴重な新発見のものでした。しかし、現地は過疎化が進み、訪れる人も少なく、ひっそりと存在する板碑は、今の内に町行政が積極的に悉皆調査を実施して、文化財登録をしておかなければならないと痛感をいたしました。

最後になりましたが、結団式、発表会等での会場設営や現地調査での地元交渉及び連絡等で、つるぎ町教育委員会の方々や一字支所の職員の方々には大変御世話になりましたことに心から感謝申し上げます。